



13
1298
9



1278
9

打田



朝夷巡嶋記全傳第二編卷之四

東都 曲亭主人編輯

初輯第十七

磨死出を礪並の月
夢を占る黒川堂

朝夷三郎義秀ハ俱利伽羅山あまひるまきらうりやいひでふてくりららやまやうあやなくあや怪あや死あや武者あやとあや見あやるとあやいあやども。
騷さわだるさわ気さわ色さわハさわなさわくさわてさわ呵あやとあやうあやちあや笑あやハあや汝あやハあやとあや何あやれあやどあや。狐あや格あやのあや化あやるあやかあやバ。
戦あや死あやのあやめあやのあや寛あや鬼あやなあやんあや調あや戯あや人あやとあや出あやてあやてあやてあや近あやくあやよあやれあや目あやよあや見あやたあやせん。
又あや望あやたあやとあやああやらあやとあやくあやいあやいあやとあや刃あやをあや進あやてあや刀あやのあや鞘あやをあや掛あやけあやたあや行あやの
武者あやハあや還あやてあやくあや兩あや三あや歩あや馬あやをあや兼あや退あや三あや郎あやぬあや一あや早あやとあやああやつあやかあやまあやれあやハあや狐あや狸あやのあや類あやハ
ああやらあや當あや時あやのあやゆあやりあや撃あやれあやるあや。平あや家あやのあや士あや卒あやのあや怨あや灵あや也あやもあやああやらあやとあや密あやにあや死
りあやああやつあやてあや假あや姿あやをあやああやらあやとあや。且あやくあや其あや処あやよあやおあやちあやのあや多あやとあやとあやめあやくあや馬あやと

乗らち間四五尺隔る。菅竹下の臥石は尻うちけて。さそひや。集
 陽人あつらふ。和君が腰刀は輝く。近づくことかひびじ。ほろろ奇
 めひそ。とむる。いづ怪しくも。あろ。始ごとく。あま。その名を。久の口。碑は。
 傳(中)も。を。は。ゆ。め。見。おん。義仲朝臣。よ。ろく。憑。礼。き。北國の。全。戦。お
 屢分捕功名。あ。岡田尉者親義。が。世。な。紀。魂。よ。さ。む。る。こ。さ。て。あ。い。め。つ
 壽永二年五月十一日。平家の大軍十萬餘騎。捕まの。大將軍。越前三位
 平通盛。美濃守。平知度。又。追まの。大將軍。小松の三位。中將。惟盛。左馬頭
 行盛。薩摩守。忠度。等。平家の上。鶴。数。を。盡。して。虎。貴。猛。卒。雲。霞。の。如。く。
 砺並志雄の。大路。より。ち。越。中。國。へ。入。り。と。ま。す。一。が。木。曾。殿。五。萬。餘
 騎。六。動。寺。の。國。府。より。般。若。野。の。所。河。端。へ。徐。と。推。菟。さ。あ。相。後。八。人。
 小八郎。藏。入。河。内。行。家。足。利。矢。田。判。官。代。義。兼。猪。六。郎。親。忠。宇。野。弥。平

四郎行平。今井四郎兼平。樋口次郎兼光。根井小弥太。行近和君の。女。
 巴の方。数。な。後。は。も。ひ。親。美。一。族。岡田小二郎。久。美。信。越。加。北。は。名。な。る。
 勇將。枚。挙。は。違。あ。も。その。紀。平。家。ハ。俱。利。伽。羅。堂。國。見。猿。馬。場。の
 堂。彼。此。陣。布。ら。又。木。曾。殿。ハ。砺。並。山。黑。坂。の。北。の。麓。垣。生。の。八。幡。林。より。松。永
 柳原を。後。ゆ。一。つ。黑。坂。口。を。南。へ。向。ひ。て。整。々。と。陣。と。り。あ。か。て。平。家。ハ。進。ま
 来。つ。て。兩。陣。あ。は。相。拒。と。五。六。段。ハ。過。さ。り。な。し。さ。も。ど。も。山。中。嶮。岨。之。疾。視
 あ。そ。わ。か。ら。る。その。日。ハ。か。て。暮。れ。ら。る。平。家。ハ。切。処。を。懸。き。人。敵。よ。も。寄。と。
 由。影。て。盾。を。敷。寐。は。覺。を。枕。は。睡。さ。ら。り。の。な。り。と。ら。り。五。月。の。天。の。癘。を。か。
 腫。は。照。せ。月。影。ハ。夏。山。懸。と。弥。暗。く。源。平。互。は。咫。尺。を。と。り。神。出。鬼。没。の
 軍。機。微。妙。に。木。曾。殿。ハ。豫。く。より。五。万。餘。騎。を。五。隊。よ。こ。ち。牛。四。五
 百。頭。と。り。集。て。角。は。繞。松。結。付。く。夜。の。深。さ。を。ま。あ。ら。ふ。め。と。紀。樋。口

兼光ハ搦手一うち廻り林富樫を相具して中山をうち登り律原一推
 寄せて大鼓を鳴らし貝を吹立樹の下に宣下打建して墓目鎬を射させ
 関を咄と覆るよなん今井根井巴の方一萬餘騎を引率して関を
 合せて進もう一度牛を討ててあちて平家の陣へ進入れり。こまじや
 田軍火牛の故事今又ある名將の謀合期して牛もろ共に突て入るその勢ひ
 破竹の如くさし平家の十萬餘騎不意を轉れて辟易一柱もさえはせ
 加賀國へ退やと黒白も別ぬ黒坂の南谷を下るとして先陣深谷へ滾
 落しバ後陣も繞て落累るをばうやあかと木曾殿ハ采配うも揮り
 味方を進めて透間もなく追勢ひハ平家久馬弥々さなりて或ハ劍戟よ
 劈も或ハ巖石ようち碎きてさし廣地南谷を人馬の死骸も埋たり
 さるよりこの谷を地獄谷とも呼做せり。この地一族太郎重義同小二郎

久義ハ比類を働かして久義ハ平家の上將右兵衛佐為盛と引組て
 その尤もとる又重義ハ平家の侍館太郎貞康と血戦して矢度敵を
 とぬ又某ハ逃るを逐ひつこの谷れらうゆく美濃守知度と半响あま
 戦やう乱軍のうかれ互に援る兵士なり。寄まや組んと馬乗ちがへく
 利も取て無事と組知度ハ平家は名々力多力多の猛將なるものなり戦ひ
 屈して浅瘡を負ひぬささるる攪る巻を放らば搦拉んと接あ程よ
 々々暗し切込なり共ニ疲勞して馬さしは躡足定りあうがれが崖岸
 我破と踏こして西馬ハ主を乗せあう千尋の谷一權と落さるが
 踏外して組る隨ハ腦を碎き此彼齊一命を傾て名々の高嶺よ
 揚るる小松の三位惟盛ハ越中前司盛俊上總介忠清ハ救もして加賀
 国宮腰佐良嶽ある濱の月うりに残兵を集るものなり。さほ其処の

溜りぬぞ聯て京より上りて木曾殿ハ逃るを逐て平家を振津州へ討
 走り。仙院を守護しされば上皇後白河院殿感大くさなり。軀て勸賞行は
 後四位の伊豫守朝日將軍は拜任。左馬頭を兼させあふ。こゝより身後は
 なまじも。死するものハ既ハ靈あり。冥かよりのを監と。又よく未来を知ること
 あり。あつて和君を木曾殿の娘なり。こゝを知りて。この物語は及ぶもの
 されば俱利伽羅の合戦は某が一族を第一の功とせしめ。勸賞も亦他
 超る。絶て恨はなれども。いふせん。我が父をくろく。数万の敵とあり。共
 この谷底は骨をさらりて。三熱の苦を脱し。も敵の怨灵ハ萬餘騎知度為盛
 大將也。夜毎は閻を揚箭を射出し。某を攻撃すと。今に至て十九年一々間
 なし。いふで勇士の資あり。ど。竟ハ出離の時なり。んと。あつて。さき
 ま。絶くその人よ。あむ。苦く。地年月を歴る。一。時あり。れ。智勇

兼備の一壯士。志々の奮縁大く。なる。ぬ。木曾殿の落胤あり。和君がたり
 ら。ど。この山を薄暮む。と。踰あ。あ。い。が。ぬ。よ。百。万。騎。の。躬。方。は。ま。あ。一。騎。ひ
 づ。れ。推。取。た。る。怨。敵。を。切。拂。ひ。勢。靡。け。この谷底を跳出る。は。数。萬。の
 讐。ハ。な。や。遣。ト。と。彼。処。ま。で。ハ。追。蒐。す。つ。が。和。君。の。腰。は。帯。あ。り。俱。利。伽。羅。の
 太。刀。は。憚。り。て。是。処。ま。で。ハ。追。跟。て。も。あ。ら。ず。敵。地。を。脱。離。し。て。棲。居。快。楽
 地。を。得。ん。と。皆。是。和。君。が。威。德。よ。し。も。され。ば。と。武。士。さ。る。の。敵。む。お。そ。れ。く
 他所へ移ら。ハ。亦。是。ら。よ。か。り。取。ら。る。べ。し。あ。の。岑。か。俱。利。伽。羅。堂。あり。音。明。王
 千。歳。の。滝。中。より。出。現。し。て。越。の。大。德。は。拜。ま。さ。り。大。威。德。の。冥。場。あり。ハ
 堂。と。滝。と。の。間。を。擇。み。て。こ。の。觸。體。を。埋。め。て。た。べ。う。も。は。不。動。の。威。神。力。と。有。縁。の
 勇士の資を借りて。永劫呵責を脱し。なん。恰。千。僧。万。卷。の。流。経。も。も。ま。ら
 功德あり。ハ。今。より。和。君。が。影。よ。立。て。その。久。後。ま。で。衛。る。べ。し。この。り。憑。あ。り

是乃假姿を顯しう。努疑ひあふ。その声さ一より其曇る月を仰ぎて
 美秀はむむの嘆息。原来和殿ハ豫くゆく。固田尉者なるより。いさ
 所ありぬらう。當時の合戦は亡父が智略軍の進退瞭然として視るごとく。
 今更くうらに於親と面を對するありして。懐舊は堪ふもの。美秀不肖
 小して。いまだ成さるな。身も亦薄命小して糧を餉を苦や。和殿
 既に神灵あり。まが久後の吉凶禍福を巨細は示し。いふ小ぞや。と叮嚀は
 向きて親義沈吟トそれを示さん。難くもあはれ。後と人の為は天機を漏れハ
 固より冥府の大禁なり。但過去のゆを述べ。後車の戒とせん。和君
 みづろ。覆明して禍を避け。抑鎌倉の古幕府。頼朝。梟雄古今を双あり。
 初高倉宮の令旨をぬり。下は美兵を揚てあり。むろ。所絶て敵を
 居あが。八州を併吞して。基を鎌倉は開くと。い。自家の経緯のそふ

是く朝廷のめんを先とせ。忠勇美烈ハ木曾殿と日と同一て論せ。う。げ。
 さ。又木曾殿ハ高倉宮の皇子。信濃の宮を主として。傳記衛をのそく
 義兵を起し。北國は苦戦して。平家の大軍を討退け。逃るを追て上洛し。
 鳳闕の守護として。上皇の宸襟をそくも休めたり。その忠の功莫大あり。
 是も小するて。官爵も大く。あ。進を。上皇の憂慮短くて。文もなく。武
 小もあ。ぬ。鼓判官。お。舌頭。迷え。果ハ木曾殿を憎せ。ひて。奏。と。由。と
 用ひ。ぬ。臆。鼓判官。して。討。せ。んと。企。め。ひ。一。先。僻。事。あり。君。臣。鮮。有。し。
 不慮の狼藉。いで。來。小。ろ。縁。由。を。推。し。安。徳。天。皇。平。家。を。ら。し。た。都。を
 落させ。あ。ひ。比。上。皇。ハ。此。彼。と。日。嗣。の。皇。子。を。え。ら。ま。せ。め。ひ。その。折。木。曾。殿
 是。め。ま。り。信。濃。宮。を。と。奏。せ。ハ。舊。を。忘。め。ぬ。忠。臣。の。美。理。賢。地
 諫言。頼朝。美。仲。東。北。より。美。兵。を。起。して。平。家。を。討。し。高。倉。の。言。ま。ひ

ちのびよ。うへせぬ。一件の宮ハ、いふとして浄海法師を討滅し。
 上皇の宸襟を休めんとし、思召出孝心より國々の源氏を召させぬ。
 うもそのうちもくも漏れし。頼政一族免道小亡び宮も流矢を
 射させてかれさせぬ。頼朝も頼朝美仲齊一起して海内を
 掃淨し根本高倉の宮より出たり。あまの美理よりせむ信濃の
 宮を即位し即ちたすあり。さへなくしてあひもけぬ安徳の兄弟
 尊成皇子をもりて天日嗣は定めぬ。木曾殿より憤りて事觸つ
 わりし。地行状をえし謀叛をどひりて。鎌倉より討て矢軍
 範頼美経を西大將より免道瀬田よりぞ攻入る。このとれ京ハ
 躬方の武士暇あり過半故郷へつるもあり。樋口二郎兼光ハ藏人行家を
 討して五百餘騎を引率して河内國へ赴た。木曾殿を勢千騎は

過に勇將猛卒死を究めて入當千なりといふ。寡ハ衆ハ敵ハかくて
 免道の隊より攻破られ京師の成を失ひつ。木曾殿ハ主従七騎粟津
 の原より移れぬ。ハ惜ざるものあり。されど軍は豫々院河
 鎌倉へ木曾追討の院宣を下されり。ハあはれむ。京師ハ空虚の才を窺ひ
 鎌倉より軍を起して猛り討く上は。武衛朝の武運微妙くて木曾殿
 亡びぬ。いへば。云云の院宣を後めどなく。武衛朝ハ平家を討て
 唱へ。その外を征せ。矢石を犯して平軍と戦ひ。絶てなし。
 木曾殿數度の苦戦して大敵を追退し。その功莫大あるを猜忌て君父の
 仇。平家をさしおた。忽地同宗の美を忘れ。躬方を移る。あはれぬ。じ。
 木曾殿ハこれ異し。鎌倉と不快のなり。食合戦をせむ。いへば。
 つゆこれ。後。頼朝ハ嫡家ハ私の怨より。朝敵ハ平家をさし

月... 一...

何ぞ彼人と軍志は美仲が美兵を起せしむ一身の爲よわんぞ。
 高倉の宮に遠送をまゐりて偏は上皇の宸襟を休りまう。朝敵を
 討滅して且私の讐を報ひよ。宛源氏累代の恥辱を雪んとす。のこ
 頼朝を疑ふ。これ頼朝を疑ふとなし。その後かゝる好まを結びて
 しが赤心を示んとす。おん嫡男志水尉者美高君を人保とす。鎌倉へ
 遣ひし人、武衛頼朝も流石は辭なきて長女大姫君をりて美高君を
 妻して一旦和睦整ふ。のころ木曾殿亡びあひり。比女塔君高きと懸せ
 つ。人の子なぬ姫うよ。多ひ死をさせしむ。あまうは苛刻に沙汰をせむ。
 仍狐疑ふ。宛癖あれば賞軽くして罰重く小過は大功をせむ。ひくえく。
 胞兄弟を憐れ。果は奥の高館あり。判官對は腹を切せ。又範頼を
 修善寺に幽殺して。ごうご一家の扞城を失ひ還。時政美時を疑ひ子孫の

うを憑れ。小鳥を養せ虎は豕兒を托す。似たり。されば。幕府虎
 ぞ。れ。今僅三年。政草は外戚の權重なり。時政幼主頼朝を挾く。
 遂は四海を吞んとす。功臣忠美を存せしむ。のハ渠が爲に滅さん。和君が養父
 美盛のハ忠直の武士あはし。時政父子が敵は是らぞ。又彼尼將軍政ハ
 漢の呂后より似たり。智術固より遅く。父兄の資ありあれば。誰が彼黨に
 敵を。和君鎌倉に召され。職祿を受あふ。君父の爲は謀を献す所
 ありん。只忠もなく不美もなく。みづろく衛を。移りゆく。世の。を。人を見
 たり。新將軍頼朝。和君の爲は累代の主君よ。あむ。和。田。美。盛。ハ。和。君。の。爲。
 嬰祿。享育の恩愛薄く。を。竊。諫。め。用。ひ。られ。む。ハ。多。ち。歎。死。つ。ま。て。
 止。至。忠。至。孝。を。盡。さん。と。身。を。殺。せ。む。君。父。は。益。なし。こ。が。説。と。る。後。に。
 多。ひ。あ。る。と。わ。ん。今。い。ま。や。れ。ま。で。之。誘。ふ。と。ひ。ひ。けて。馬。を。閃。り。と。ち。乗。て。

人魂のとき
なる君うき
むらさきあへ
おれいさひ
とけのほち

朝ひ



月夜二編

車馬二編

俱利迦羅堂のくを投ておぼろとせハ忽地ハ形ハ滅てかりたり。義秀も
 忙然と彼此をんらる。觸髅ハ舊の如くありて又その人の影ハせむ。夜ハもや
 初更の比やして薄曇なる月ハ朦朧として出や。木梢の木葉吹落る。
 山風凄しく。溪澗の深う添く峯ハ北恋ハ牡鹿の声寤寐ハひといひ。
 巖根枕片敷て叫ハ猕猴め、はしく腸を斷媒となるのち中て事問人
 よせがハ絶くあうらる。且して美秀ハ件の觸髅をとりあげて。つくづく
 見つ嘆息ハ昔人去く再びうらむ。僅ハ枯骨ををりて。是ハこの親美
 その名やえハ智勇の武士ハ今もあややハやあやねも。
 こそを有縁のものとありて。觸髅をよせらる。過去來の物語
 あり。こがゆくを急を滅。言の葉ハみか金玉あり。おめをハ人の榮枯寵辱
 その差あやよハ死てハ生とあやがるや。嗚呼痛む。悲む。

請よ任してその如く埋人とせりて。堂のほとり。赴く程ハ前面
 よりある行脚の女僧細代の笈を脊中く。錫杖高く衝鳴ら。行
 ちがやうやう。背向ハ信と透して。觸髅を取らんと。とて。美秀ハ
 冷笑ひて拂除人とあつれども。千引の石を推。撓を去らず。立る形勢。
 ちがひねが驚と。つ。そがま。左よ引つて。拉人と争ふ。おなド
 山踏を登り。禪衣被る。一個の行者近づく。まよ透して。走り躓て
 件の觸髅を。それもとんと。黄縁。美秀ハかほら。と。あやう
 こちと。刃を反り。左右を柱る。煉の粟刈。あ。劣らぬ。迷の巻術。
 洲濱輪違。鼎足跟廻して。衝。拂。又。冬樹の蔭。よ。も。と
 う。薄月夜時。移る。ま。挑。三人。觸髅。より。引。あ。ふ
 卻含。よ。お。せ。ハ。觸髅。ハ。石。ハ。炭。夫。と。碎。け。く。隠。と。立。沖。る。燐。火。よ

三人顔えありき。そは和子なぐすや母御なり。一三どのの葉ふぶの。これハ
 ちと。と西三歩。遠巡して三方へ立退たつ。諸膝を齊一殿と拍音は驚た
 覚く目を仰け。是華昏国の一夢なり。俱利伽羅山はゆたるとして。
 明王堂の欄干は頬杖つ死て臥もかく。その夜を明を秀秀ハ身を起し
 つ腕を捺して傾く月をうち仰た秋の夜なき比かぐ。途の疲勞は
 熟睡を多んそや。曉がこよなりみたり。あハ地名も俱利伽羅のこが腰に
 威徳よめて。いぬる壽永よ討死せし。岡田冠者親友が怨敵の呵責を
 脱し。彌骸をそれと托せし。久後のみさよ。説示されし言の葉ハ
 かほ耳底に留まり。夢と覚るも現の如し。加以曇る夜は。融骸を取ると
 争ひし斗藪の女僧ハ月来日ごろなり。とあふ養母なり。たつとつと
 一三さへ異なる行脚の打拂して。共は挑こ。為体何の故もあらうほ

が。是も亦親友が靈魂の所為なり。こが母ハ恙なく道心堅固よ
 廻国也。とその形容を夢みんせし。狄泡沫夢如と序屠家ハ説ぬ憑
 む。足らぬやあぐ。へりへ五夢の辨あれ。その扱をといひ。ぐぐぐ。これ
 まれ彼彌骸を素ねんや。とひとごち。明王堂を立出ると。千歳滝ハ
 う。よ。赴け。鮮明の月隈なく照らして。差哉。と深山寂寞。と。これハ
 あり。松の下は物しをあれと立よれ。果して一個の彌骸あり。と。あびて
 熟視する。夢よえつと相似。是。と。感悟し。つ。試。と。の融骸を
 他所へ移さんと。まると。き。その重たし。磐石を抱る。異なる。に。舊の処へ。て
 之。せ。その。軽きこと。木葉の如し。原来この樹下へ埋め。よ。その示現。か。と
 更。は。曉。と。く。溪。澗。ある。竹。を。伐。して。土。掘。り。と。し。地。を。掘。ると。五。六。尺。件。の
 彌骸を瘞りて。ほとり。近き立石の穴。ある。を。轆。よ。せ。て。又。推。立て

墓石と一墨斗の毫を抜せし。岡田冠者親義之墓と一行の書
 つけく。樹の條おても向つ。俱利伽羅の大刀引抜て南谷のくを疾視
 朝夷三郎美秀くまあり。朝夷三郎美秀くまあり。平家の怨霊退
 退散せよと。伐攘く。数回又と。鞭をかきめ。石傍を搦ひて
 漱比明王堂より。且く行念。程は天のわのくと。明を。たて
 砥並の嶽をぐる。婦員の黒川まで。来た。一三が。の。り。なる。
 観音堂へ。あひぬ。當下。三ハ声高。ゆるに。けく。遠く。走。近
 づ。三郎ぬ。な。遅。き。や。友。鶴。の。い。の。さ。さ。あ。り。あ。ろ。ど。夫。婦。が
 待。び。て。き。の。も。日。り。じ。お。ん。が。る。の。も。い。ひ。竭。さ。る。が。あ。ろ。苦。しく。
 を。異。の。歸。郷。を。祈。らん。為。ご。心。り。黒。川。る。馬。頭。觀。音。借。し。く。誘
 へ。とい。そ。ぐ。せ。ハ。美。秀。は。う。ち。微笑。て。彼。佐。味。竺。内。ハ。小。松。は。在。ら。せ。と。あ。り

つも。彼。処。まで。ゆく。序。は。名。所。古。蹟。を。ん。お。め。と。て。あ。ひ。起。せ。し。旅。な。ら。ば。
 結。ま。ま。い。日。を。歴。す。某。の。名。は。老。人。の。ま。る。く。あ。る。物。詣。ハ。罪。を。深。し。
 う。の。陪。話。つ。これ。より。足。の。運。び。と。早。めて。う。ち。つ。れ。そ。く。還。る。程。あ。ろ。ま。
 再。く。や。中。昨。夕。の。夢。は。この。一。三。が。禪。衣。を。被。け。り。ハ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。さ。
 なる。觀。音。詣。の。う。ろ。さ。は。彼。我。も。さ。あ。り。祥。あり。死。余。ら。ば。母。も。恙。を。今。高。
 廻。国。を。あ。り。と。疑。ひ。か。し。と。憑。く。あ。り。の。う。ち。心。を。つ。つ。あ。り。人。の。言。う。
 多。う。さ。ま。ば。その。日。の。黃。昏。一。三。の。ろ。共。岩。神。ある。宿。所。を。之。り。念。ぬ。の。夕。
 園。宅。の。奔。走。友。鶴。ホ。が。款。び。の。為。体。人。の。問。答。さ。へ。精。細。に。写。し。出。
 さん。は。く。し。く。一。れ。ま。い。ん。の。一。條。ハ。省。略。ぬ。却。脱。今。茲。ハ。果。敢。て。卷。て。
 あ。り。璞。の。年。立。之。り。建。仁。二。年。二。月。の。天。稍。長。閑。は。な。り。一。ハ。美。秀。ハ。又
 さ。さ。さ。さ。行。装。を。整。え。下。野。へ。ゆ。く。當。下。あ。ろ。判。五。夫。婦。ハ。一。三

共侶練るや下野ハ敵地之彼刀野太郎と申人謀るも其身を害
 せんとまつるよとバ豫てぞ申ぬや吉見ハ良友ありともあはれ
 知已ハあはれと父母兄弟ハあはれ申すも後ハ訪でも夏ハ缺ま
 ぐてもあれと辭齊一禁やられバ秀野頭をうち掉支鶴も
 きのよふその身をのまらぬ之況て老る人ハみか心よくあ
 るともありあん然バ仇をおきて前縁は背んとバせむ所時夏
 あり後謀るもこれハ受邦井平ホ資あり何ぞとて此ハ大約ハ度
 仕歴ハ吉見を訪人爲のともあはれハ春ハ師に健田翁の小祥忌初
 夏ハ父養父の大祥忌辰ハ相當す舊里ハあはれ憚とあはれ下依
 赴て許我の間中寺あり墓系して師恩を謝せんとあはれ豫くあり
 いひ記吾儕ハ一所不住のりハ男子ハ四方を家と候といふやいつれ

地とてあはれん形ハあはれ後者ハあはれ沙汰ありもつやくけ
 りい下り厄ハ遇ふとあはれ後者ハ足黄縁あり却てあはれ
 られハのよと念ハあはれ自愛ハあはれと統論しハ後ハ再禁ん
 よもなく衆皆嗟嘆とあはれ且くして判五妻ハ備ハ友鶴とん
 あひりハあはれ又上坐ハ小膝をまら三郎月ハあはれ
 あらハあはれあはれあはれ返してあはれ苗ハあはれあはれ
 有身ハ帯ハ程あり侍ありれハいとおはれ女見ハあはれ親の
 あらハ察ハあはれ立之とあはれいつれハ侍人と同ハ秀野
 申ハ春の下辭遅くも西三月ハ信れとあはれ過世ハあはれ
 申ハ縁ハ結びハあはれ心ハあはれ死ハあはれ彼ハあはれハ翁夫婦ハ
 うち任せハあはれ愛顧ハあはれ易ハあはれ友鶴ハあはれ如此ハあはれ

忘るるも母の後方退却して坐す涙さしぐさなり。程に美秀は心づき
 只むる。若神を首途して日歩の夜宿も九夜十日と旅宿をなね
 先下総ゆき赴たる。翌ハ師の亡日なり。その日は許我を忌む。間中の
 野寺へ詣つ。先師の一周養父の三回。かの寺で修行をせむ。其れが
 老僧云云の事を告て布施敷きて其れが。軀て近郷より法師を集合。其れを
 経を繞ると二夜三日及びびたり。その日の雜費は箱判。豫め資する所
 なるべし。追薦の法會果なれば。美秀は秀作が墓に詣て別を告。送
 安房のくを拜して。養父の菩提を祈念し。許我は相識る里人おの
 送られ。野木の驛あり。袂を分ちひたり。下野へ赴く程。煙あり。其
 孤邸の柳紅あり。き田家の桃世。日よま。と暖た去歳のその日も彼
 りたり。足利へと起行する。弥生の比よりあり。なり。

作者云義秀ハ謙倉ノ生且て安房ノ人とする。仇を報。亡命して。圖
 らど下総の許我ニ寓居し。更ニ下野足利より。學校に入。人として果
 さ。加賀の小松に赴。及び。不憶も越中なる。巖神ノ杖と駐め
 舊故。竭。美婦を娶。と。處ると。僅小暮月。追下。又下総ニ
 旅宿。その師と養父の年忌。吊ひ。今又足利。赴。再友を
 訪人。と。譬。過海。の船。の港。湊。入。歌。如。その居る。所。久。く。由。く
 如。み。み。中。と。と。或。ハ。蛇。蝎。觸。體。の。怪。あり。或。ハ。怨。讐。山。賊。の。り。あり。て
 地上の風。小。惱。さ。る。か。と。不。義。秀。建。保。の。役。に。敵。破。破。圍。を。出。海。し。片
 こそ。島。と。と。ち。巡。り。の。と。る。と。弱。冠。浮。浪。の。為。体。も。亦。鳴。め。ぐ。と。い。ひ。は。

初輯第十八
 苗頃時の濁水
 客去雁の春霜

吉見冠者義邦ハ曩ハ義秀乃不別也。比井平と亦その主なる時夏
 召之とて主後とも疎隔するに彼を召ひて召之とて召之とて靴を隔
 癪を搔く。あちのときあちのとき時夏不憚り。坊よりとる年暮て
 簷下の梅不鶯の来鳴く朝の八重霞里より雪ハ消初と。遠山ハ稍春の
 多ふ入ると弥生ハ近づく。加北より下とびと義秀が信やえいふ
 少小と想像る。山河百里を隔て言告やん便宜もろ。折陸奥
 入。按察使藤原泰衡が残党大河太郎兼任が一子。修羅五郎經任と
 少の竊ハ先亡の餘類を集く。厨川の古城ハ蜂起。伊豫判官義經
 のおん子るると仍給く。逆意ハ奮ふより粗そのゆえあり。彼藤
 原泰衡ハ鎮守府將軍秀衡が子るるといぬ。文治五年夏四月泰衡ハ
 父秀衡が送訓は叛きて。國衛と相縁り。衣川の城を攻く。判官義經

首級ハ鎌倉にやめせ。恩賞ハ乞けよ。その沙汰ハ及ぶと。曩
 ろハ泰衡皇命を蔑如して義経ハ荷擔する。その罪を輕うす。今
 さう勢も出さず。許さざるもの。幕府朝もろ。大軍を以て
 奥州に進發。大関山に圍衛を殺。糟部ハ泰衡が頸を獲。合戦
 僅九日。過む。陸奥出羽二國平たぬ時。秋九月あり。このち建久元年
 の春二月泰衡が家臣大河兼任謀叛。膽澤郡平泉の柵を築。誰
 也え。千葉ハ常胤比企判官能員亦追討の將命を兼。平泉に誰
 上せ。遂にその柵を抜き逃。追ひ。栗原より。兼仕を撃と。あ
 長より奥羽に異。今に至る。十三年白波ハ風騷。緑林
 條を鳴。又經任が及逆のゆえあり。現この比の風聞。件の疑仕
 切。軍用ハ入。野客山家を相禪。近國ハ遣。官物

を盗とせ民財を奪とせり。こゝろ厨川の柵に積貯へ進むとれたる教
郡と畧し退くとれたるその巢を成るの謀をたるとりてさむらひ。岩崎
菊田白川よりこゝろ常陸下野の間をく人のあつた長雨さむらひの戸道と
固く賊を御ぐを勢とせり。故あるさむらひの正治二年の冬十月。鎌倉あり
頼家卿後三位の叙し左衛門督に任じあつて去年。改て建仁元年とせり。の春正
月。足利より特任賀儀の御物併に義兼の舅。執權時政への贈りの金浪珠玉
武具。巻絹ると夥の小舟。駒小附のりて。鎌倉へまわらせり。あつてとらまへ
つぐむわあつてその暈昏に披野の船橋をこゝろをる。數十人の癖者出て
義兼の使者某甲を砍ころし。輕率奴隷馬奴亦を殺せり。物残つた
奪とるこゝろ。踏火暗した。こゝろ未曾有の珍事。是れ義兼忠將
あつてとら外圍を憚つた。こゝろ鎌倉へゆえあげを怒り押へ恥れ忍び
つぐむわあつてその暈昏に披野の船橋をこゝろをる。數十人の癖者出て
義兼の使者某甲を砍ころし。輕率奴隷馬奴亦を殺せり。物残つた
奪とるこゝろ。踏火暗した。こゝろ未曾有の珍事。是れ義兼忠將
あつてとら外圍を憚つた。こゝろ鎌倉へゆえあげを怒り押へ恥れ忍び

再び彼進物を舊の如くとせり。又さつて夥の武夫。小宰領さつて鎌倉へまわらせり。
この比より郡監目代義兼の密意を養ふ。さむらひはくは夥兵を部し。彼盜賊
さむらひを捕んとし。同ろの時ろく穿鑿せり。小終つてその所在とさつた。さつて
この民間より盗るものあつたとく人々を警衛せらるる。かゝる今茲
建仁二年の春。小治とて経任がらゆる。さむらひへ命更に罵り。騷き。原来件乃
偷見へ終羅五郎が餘類る。人里へ入らむ。ち維つて。さつてとあつて入替と
互にさつてあつて。稻小風声。このろのさむらひ。さむらひ下知。さむらひ。維ゆとせり。
賊を搦捕るものあつた。夥の賞賚を賜へたる。益の難談。さむらひ。
つぐむ里。毎小掛さむらひ。賊へさむらひ。他郷へ移る。さむらひ。
絶えさむらひ。こゝろよ。さむらひ。義邦へ。秀を。誘せん。よ。去。藏。よ。
鳴便る。さむらひ。さむらひ。小黙止。さむらひ。不題。足利の郷。小。稻。遠。さむらひ。ぬ。梁。田。者。

赤貝の莊客小春田の苗四郎といふあり。あつとけつと。その子藁二郎といふ。
 年よと吉見よあつとけつと。美邦仕へつ。町中のりふい管つと。いと直成さる。
 めつりえ奉公年来よりし。べこの春身の暇を多かりて。親里へ還つとる。
 その代の小廝とし。後方るをける。鳴子の引太郎といふあり。又吉見へ
 おつとけつと。約束をきつと。頃と。如月のさるるのまへ田と。鋤細を
 うつとけつと。そのる。あつとけつと。三月の節供はよりし。この日親苗四
 郎へ。いと吉見へい。いと。任の引太郎は。髪結せ。洗をえ。布子と被せ
 古る。夜葛籠と。畏の鶏卵を齎つ。いと。あつとけつと。義邦の宿野へ。いと。つと。後
 忘野の小松が。下。推。芝を。祖。いと。あつとけつと。熱。酔。臥。いと。大。漢。あつとけつと。立。あつとけつと。つと。ふ
 その。画。魂。下。瘴。あつとけつと。野。客。あつとけつと。この。と。引。太郎。は。伯。父。の。袂。を。密。と。引。つと。
 一。反。あつとけつと。退。えつと。指。つと。耳。語。く。あつとけつと。彼。酔。客。の。偷。見。あつとけつと。い。ぬ。比。つと。村。中。

物々畧々走らる。面貌は怒りあり。伯父公何と見ゆ。彼奴が。夜乃。蔽。こ
 う。ふ。他。び。る。く。懐。つと。と。頭。と。出。つと。つと。袷。ハ。十。緒。は。あ。ま。つと。ぬ。べ。瘴。者。つと。む。と。
 雅。う。ふ。つ。た。偷。見。を。捕。る。ゆ。め。の。野。客。の。賞。錢。を。多。り。又。と。守。より。徇。を。ま。つと。む。や。
 吉。見。殿。へ。見。糸。の。牽。生。物。は。彼。奴。を。捕。つと。あつとけつと。う。ろ。う。入。索。の。准。備。を。き。の。ひ。後。と
 あつとけつと。相。彈。へ。苗。四。郎。沈。吟。つと。汝。が。較。計。よ。と。い。ふ。も。醒。る。は。毛。を。吹。き
 疵。を。求。ん。再。び。入。つと。密。詰。ハ。引。太。郎。ハ。笑。あ。つとけつと。何。で。あ。つとけつと。つと。つと。吾。侪。も。手
 來。相。撲。か。始。む。村。中。一。二。を。争。ふ。め。く。伯。父。公。ハ。老。て。も。筋。骨。剛。い。か。え。え。と
 索。を。被。入。と。宿。鳥。を。と。ろ。つと。易。う。り。る。ん。と。い。ふ。せ。せ。苗。四。郎。点。び。て。引
 太。郎。が。脊。負。つ。る。葛。籠。ハ。其。処。あ。つとけつと。ま。つと。け。麻。索。を。引。解。れ。つと。その。枕
 方。よ。つと。後。方。より。近。づ。つ。た。つと。楚。と。あ。つとけつと。起。人。と。さ。る。あ。つとけつと。起。つと。立。む。と。合。つと。く
 採。え。つと。足。を。捉。へ。つと。引。倒。し。て。ぞ。索。を。被。る。と。ける。瘴。者。ハ。欄。め。ら。れて。睡。と



苗四郎
殺し等を
五頭平を
謀る

卓
二
一
卷
四

刀
野
五
平

早
五
平

早
五
平

月
一
三
六

共不寐へさめ入眼公眸。苗を切アと怒れどもその甲斐ある。罵たその
 途。阿容と追まきて吉見のえ牽きわく。浩如は刀野太郎時夏を
 春の日消し花をさぐり遠騎不出とえ馬奴の遠み後とく井平郎と
 後ひつ途のゆて不牽とある。瘴者は眼をつけ足掻を早えく同辺くえ
 る。この瘴者へ豫く相織る。早蠅の五頭平らるとえ不驚を騰と声を付
 縄とり男をぬびとめく。その故を向へ苗四郎引太郎共侶忘野の芝生
 ちと瘴者を搦捕る。為体を物ぐる。又牽立くわんとさとと。時夏
 声をいつじと且く等とぬびえ。軀く馬より飛下り。袴の皺を伸し
 又苗四郎もち對ひ汝も脾弱き土民とく。この瘴者を搦し。その功
 あり不勉くとも。這奴隣臥る折るま。索被らとる。のろの。り中途
 ちと索断はホをもち倒し。逃さるも側り。これへ刀野太郎執槍

の縁者。當領主の疎く。よた不計ひる。せま。瘴者をこ。一處とせ
 とひつ。つらとよとんとま。引太郎の冷笑ひ雅人。もをり。ませ功名。が
 ちと。僕只管伯父を勧め。搦捕る瘴者をえ。て。遠く。ま。け。と
 へ。苗四郎使男。遠く。吾們の吉見。由縁のめ。か。へ
 こ。其れへ。彼刀。進。庄客。武藝。な
 境垣の朧結。締括。縛。解。例。の。遺。の。の
 日。の。と。の。ひ。太。目。を。注。立。人。と。時
 夏。曾。満。面。忽。地。火。の。如。過。言。り。土。民。其。知。る。退。死。を。抜
 手。尖。く。丁。と。撃。つ。る。大。刀。風。は。苗。四。郎。の。肩。尖。四。五。寸。破。ら。と。苦。と。叫。び。あ。ま
 仰。さ。る。小。休。し。引。太。郎。の。聲。馬。き。る。が。い。そ。が。り。く。葛。籠。が。あ。ろ。瘴。者。を
 うち捨。組。と。ん。と。近。つ。知。時。夏。の。か。を。刀。小。乳。の。下。ろ。礮。と。破。る。火

所^まる^まと^まの^ま血^ま氣^まの^ま壯^ま俊^ま塊^ま礫^まを^ま搔^ま觸^まと^ま頻^ま々^まに^ま打^まく^まは^ま苗^ま四^ま郎^まも^ま才^まと
起^まり^まて^ま倭^ま登^まる^まが^ま時^ま夏^まが^ま後^まより^まと^ま組^まむ^ま左^まの^まと^ま振^まか^まと^ま足^まと^ま飛^まと
丁^まと^ま蹴^まる^ま蹴^まと^ま撞^まと^ま轉^ま輾^まへ^まハ^ま五^ま頭^ま平^まハ^ま背^まを^ま縛^まめ^まら^まし^まる^ま儘^まり^まて^ま衝^まと
よ^ませ^まく^ま苗^ま四^ま郎^まが^ま背^まを^ま楚^まと^ま蹴^ま躪^ま身^まを^ま壓^まみ^まと^ま動^ませ^まど^まの^ま隙^まハ^ま時^ま夏^まハ
引^ま太^ま郎^まが^ま才^まを^ま反^まり^ま踏^ま込^まて^ま又^ま下^ま大^ま刀^ま臂^まの^まあ^まこ
ま^まを^ま砍^まつ^まと^ま叫^まび^まと^まあ^まへ^まを^ま臥^まさ^まる^まあ^まび^ませ^まけ^まる^ま砂^ま飛^ま礫^まハ^ま時^ま夏^まハ^ま眼
眩^まと^まど^まろ^まぎ^ま醫^ま居^ま小^ま横^ま地^まと^ま坐^まる^ま遠^ま矢^まは^まら^まと^ま引^ま太^ま郎^まハ^ま慌^ま忙^まき^ま才^まを^ま起^まと
腹^まを^ま人^まと^まと^ま前^まより^ま馬^まの^ま籠^まと^まり^まと^まち^ま衛^ま工^まと^ま井^ま平^まハ^ま衝^まと
出^まて^ま立^ま塞^まり^ま閃^まと^ま刃^まの^ま光^まハ^ま翹^まを^ま仆^まし^ま引^ま太^ま郎^まが^ま首^まハ^ま地^ま上^まハ^ま落^まと^まる^ま
時^ま夏^まハ^ま禁^まめ^まる^ま涙^まと^まも^ま眼^ま中^まに^ま砂^ま飛^ま拭^まひ^ま仆^まと^ま苗^ま四^ま郎^まハ^ま背^ま
前^ま矢^ま觸^まよ^ませ^ま刺^まと^まる^ま且^ま彼^ま此^まを^ま見^まえ^まる^まふ^ま事^ま人^ま絶^まと^まる^まと^まハ^ま五^ま頭

平^まが^ま索^まを^ま断^ま釋^まと^まむ^まと^ま血^ま刀^ま拭^まひ^ま納^まり^まて^ま彼^ま処^まへ^ま來^まと^ま指^まさ^まり^まて^ま五^ま六^ま町^ま乾^ま
ある^ま茂^ま林^まの中^まへ^ま退^まけ^まバ^ま井^ま平^まも^ま馬^まを^ま牽^まつ^まと^まそ^まが^ま三^ま人^ま樹^ま陰^まハ^ま集^ま合^まぬ^ま扱^まも
刀^ま野^ま時^ま夏^まが^ま癖^ま者^ま五^ま頭^ま平^まを^ま救^まひ^まる^ま縁^ま故^まを^ま尋^まる^まと^ま彼^ま修^ま羅^ま五^ま郎^ま経^ま任^まハ^ま奥^まの
膽^ま澤^まハ^まわ^まり^ま野^ま客^ま山^ま豪^まを^ま近^ま國^まへ^ま遣^まし^ま就^ま中^ま下^ま野^まハ^ま結^ま城^ま朝^ま
足^ま利^ま兼^まを^まそ^まの^まう^まて^まへ^まで^ま躬^ま方^まハ^ま引^ま入^まし^まと^ま早^ま蠅^ま五^ま頭^ま平^まと^ま又^まの^ま
小^ま賊^ま副^まて^ま去^ま歲^まの^ま冬^まより^ま當^ま國^まへ^ま遣^まし^まと^ま結^ま城^まハ^ま固^まより
忠^ま美^まの^ま武^ま士^ま之^ま美^ま兼^まハ^ま時^ま政^まの^ま女^ま塔^まなる^まを^まと^ま能^まく^ま密^ま意^まを^ま通^ませ^まし^まも
た^まし^ま只^ま刀^ま野^ま時^ま夏^まの^ま執^ま權^まの^ま縁^ま者^まなる^まと^ま娼^ま酒^まの^ま為^まハ^ま志^まを^ま移^まと^ま利^まを
め^まと^ま誘^まひ^ま動^まし^ま易^まに^まめ^まと^ま定^まり^まと^ま告^まる^まの^まあ^まは^ま五^ま頭^ま平^ま竊^まハ^ま欽^まび^まて^ま学^ま校
游^ま学^まの^ま渚^ま生^まハ^ま打^ま扮^ま時^ま夏^まハ^ま面^ま濁^まして^ま種^まの^ま遺^ま物^まハ^まその^ま心^まを^ま樂^ませ^ま親^まく
譚^まハ^ま厚^まく^ま交^まり^まて^ま遂^まハ^ま件^まの^ま機^ま密^まを^ま告^まる^まと^ま時^ま夏^まハ^ま一^ま錢^ま及^まば^ま愉^まく^ま諾^まひ

目代八嶋室平は賄賂をく和殿を救ひ平久の件は嶋室平は某と交馬を
 絆を謀るは便宜の友と和殿一旦獄舎を繋れその支黨を問ふと此言見
 美邦が汲引ゆく鎌倉殿へ進せあつ賀儀の貨物を棄とるぬ美邦ハ
 豫てあり。経任は同意せり。こゝその亡父範頼の怨を報ん為なりとそ
 當國小の外の内応の武士なしと真志あるは首伏せば美邦捕れ
 めんかくて和殿ハ獄屋を踰闕隙を潰く脱と去るとも美邦の料
 重死ありて和殿の追捕ハ緩やうなりんこの外ハ施すべき謀絶てか
 後まなべ幸ひなりんと真実ごちて相後ハ五頭平吹てうち点既寔危記
 計略あどもの萬死と出く一生を保つとあれらよあつたはゆがごうん
 うくも計ひかへと立地は落ひく時夏竊は飲びて軀く五頭平を索を
 被て井平をぞ招たる。このと死媪子井平ハ一及あまり退死く。ゆぐる

杉馬を繋ぎまが刃草を折敷く密談を洩きくめれぬ。なやえぬあち
 あく召を隨ふ応もあむ主の母と人本まなべ時夏莞尔とち笑と泣の
 るが密謀をたうなつたゆつん所存あふいと子井平擬後き気色を
 否を声の低うしうは定くよはせとむいむ何するあめと問くせば時夏もあ
 うち笑とて汝ハ去歳の夏の比美邦許をううバ心ゆとなくあひふ責を
 存せるとなく進平のそなうバ曩まの意中を察して逃んとしたる
 莊客を歩も走らせむ勢留りう賞忠し。あはれやうてあむるもこれ
 疑いもこの五頭平の志のびくも宿所へあつるもの思とてあらんぬん
 この儘目代八嶋は遞与まの更は救ひ出さん為る絆のあちをぬらうとの秘
 と口を緊めく五頭平が繩をとくせ樹下は立たうつ。みづく馬を牽出して
 閃とと乗る足掻をそやめ。そがまハ島室平が宿所へ赴死呼は就て

あつに對面し某々すも速騎して之るさよ志野のほとりあり人を殺し。
 物を畧る癖者をもてらまはるる一がく主従二人踏んで生拘つその處を
 責問し渠ハ原是被羅五郎経任が間諜者之當国吉見は内応のせ
 あまは姿を窺ひ徘徊してそが便宜を候といへる。あは輕くさる罪人かし
 帰宅し及ぶもねむるも宜披露をぬるべしと言變を告ぐ。平六は
 歎ひて夥兵して彼癖者を縁類近く牽居させつり。視るは面魂現尋常の
 むのあは流その名を問は五頭平と名告ぬるまひて鞠問をせられ是具獄舎
 牽立させ時夏を勞ひてその武畧を稱賛し。ある領主は披露せ必鎌倉
 上達せしむらばその勸賞は本領をへらみたり。召出されぬと更も踵を
 旋せり。師任も亦和君の爲力を竭して提擲べし。吉左右を候あひひと
 いれり。時夏喜悅は堪む小膝を進めり。閑然。日ハ西山は傾く比屋平に

別を告井平をぬく還る程は勿心地馬を駐めて頻りに後方をえん之れは
 井平はあはあはぬていそく走近つた。その時夏声を低りし。汝を
 何とあまが彼二人の下郎奴ハ何かひなるものありん今きくその名を問ふ
 由なり。汝ハ再び彼れへ赴た彼風声をきくとあは走るとそを告ぐ。彼奴が
 親族里人ハ死骸のほとり集合え吉見は由縁のものとあはつり。あは
 なる人なりとせむの心もあは所あり宿所へハ程遠くは。これハ一騎でえ
 えむ。さうくといそがせ。井平はらろの中よ天の祐と歎びて一錢は及ぶ領主
 死がとくよ去去は時夏ハ馬を早め。その宿所ハゆき。吉見尉者
 義邦はうるべしとハあやもなく三月の節供は紙離の立つを如かむ。あは
 小松の信を心よまき。廣光と美秀がむをの。とあはん。うらやあんと想像つ
 瞻仰る天よ幽は出。三日の月その黄昏よあひけ。井平が身つは。浅井

告一うハ美邦主後統つなぐら。馳て洞室ヲ招入る。其ハ廿廿平ハ加戸喘吐。其
浅良井がむめぐる。一碗の湯を飲竭して。をわめて吻と息をつき後方をへんぞ。
美邦のほろり近く声を密ま。輝急が安否を訊ひ別後の情を遠及。及む
その故ハ箇様々如此。この事あり。と郷間。刀野時夏が忘野のこを。五頭平と
子癖者を生拘まら。莊客二人を砍殺せ。輝の趣又五頭平と相謀り。美邦を
陥。渠を救んと。奸計。の顛末を告る。な。美邦主後。う。驚き。或。恨。
或ハ怖れ。膝をよせ額を合。い。う。せ。ま。と。ひ。ひ。の。謀。を。向。う。廿廿平を。受。
あむ。三十六計走ると。と。今宵竊ハ他郷へ走ると。危歟を避。か。又。身。を。邪。と
よ。も。犯人既。名。を。指。く。云。云。と。い。は。れ。陳。謝。の。詮。あり。と。加。以。目。代。八。嶋。ハ
時夏と交。ハ。驚。一。領。主。ハ。執。権。の。女。塔。あり。ハ。時。夏。を。疑。ひ。を。還。て。死。を。疑。ふ。
又。彼。莊。客。枕。を。な。む。と。命。を。其。処。ハ。隕。せ。う。ハ。堆。う。その。真。偽。を。諦。さ。ん。身。の

潔白を憑り。危く蹤を暗せば。卻やま。曩も告ま。せ。如。某。時。夏。が
真の家僕。ハ。い。は。れ。且。く。これ。後。よ。め。の。ハ。勢。ひ。已。と。を。ほ。が。れ。バ。且。その。人。と。あり。
狼戾野心主と憑む。足がれ。バ。脱。れ。去。え。と。あ。ふ。と。去。歲。の。六。月。朝。夷
ぬ。を。郊。外。に。送。り。日。共。よ。の。地。を。去。む。と。あ。ひ。ひ。の。彼。ぬ。み。如。此。と。諫。れ。
尉者の。為。は。留。り。多。し。誰。う。き。時。夏。ハ。利。ハ。誘。は。て。恩。美。ハ。叛。き。逆。賊
経任。ハ。一。味。して。その。支。黨。と。角。を。比。領。主。の。調。貢。を。棄。畧。せ。く。尉。者。ハ。陷。ん
と。も。衆。入。を。欺。く。と。天。の。網。ハ。脱。れ。ず。と。今。を。う。け。ぬ。と。あ。り。つ。後。よ
と。兒。ハ。賊。徒。と。君子。ハ。渴。を。れ。も。盗。泉。を。飲。む。靡。去。ハ。嗟。来。の。食。を。受。む。是。を。う
去。る。き。時。至。ま。る。幸。小。して。棄。ぬ。む。ハ。尉。者。ハ。後。ひ。き。ま。て。身。を。脱。し。ん。と
あ。の。と。雲。時。も。猶。豫。ま。ら。く。尺。起。行。の。准。備。あ。ら。ま。ほ。一。集。ま。る。の。を。
告。あ。め。く。せ。ん。と。あ。お。時。夏。ハ。莊。客。が。尉。者。ハ。所。縁。あ。る。の。を。い。ひ。つ。る。の。を。あ

その名をきくも宿所も定らざれば。あはれみのすをまぐりて。途より又
 某を死骸のほらう遣ふ。稍黄昏なりし。天の祐と竊に飲び彼れ赴く
 おもちて。歩道を走ると。瞬息に危窮を告ることをぬらう。方は是神明
 佛陀の冥助よると。正首は意中の機密を説示せば。美邦主従感佩し。く
 霎時嗟嘆の声を絶ぶ。さうおも彼癖者五頭平と申人を生拘りて。時夏
 殺されし。そのれ共ハ誰やうあらん。あはれよ由縁ありし。皆けは。珠更不便
 彼れこれと主従が。さうおも何定りし。さうおも。有也無也の関を。なほ
 縁類の雨戸を。さうおも。引開て殺されし。僕が親と。後才て。いと。ひひ。裡面合
 のあり。倉鷲死て色を失ひ。行燈の灯口。向て。晴を定め。く。つ。く。視るよ。
 便是別人あり。む。い。ぬ。る。比。刃。の。暇。を。乞。て。赤。貝。の。御。小。う。り。し。蒙。二。郎。あ。り。し。れ。ば。こ。の
 い。ち。ち。と。再。び。果。て。面。を。見。あ。は。れ。め。い。を。當。下。蒙。二。郎。雨。戸。を。引。開。端。折。し。る

裾をかろりて。潜りて。進み入り。刀柄。柄。の。と。驚。死。め。る。僕。竊。ま。あ。め。つ。り。し。
 おか。ど。ぢ。あ。り。し。様。よ。あ。り。し。親。の。苗。四。郎。八。郎。の。引。太。郎。と。い。ふ。の。當。家。の
 小。廝。よ。ま。め。つ。せ。ん。と。これ。を。得。て。看。所。を。半。八。郎。の。比。及。も。い。く。ふ。る。よ。忘。野。の
 ぼ。ろ。ろ。と。兩。人。も。も。砍。殺。され。し。と。さ。う。おも。告。る。の。あ。は。れ。僕。哀。傷。悲。歎。堪。を
 村。長。里。人。共。侶。よ。走。り。ゆ。り。て。死。骸。と。さ。う。おも。領。主。の。目。代。八。嶋。河。の。移。兵。も。墓。り。て。
 此。彼。と。展。覧。し。僕。も。示。し。ゆ。る。の。あ。は。れ。を。害。せ。し。五。頭。平。と。い。盗。賊。之。五。頭。平。ハ
 ち。ち。捕。捕。して。既。に。獄。舎。に。繋。れ。し。う。原。是。吉。見。は。等。類。あり。と。さ。う。おも。の。ち。ち。あ。く
 首。伏。の。赴。の。も。定。ら。ず。に。再。て。穿。鑿。せ。し。れ。あ。の。首。を。さ。う。おも。ほ。ろ。ろ。と。死。骸。を。遮。与。ぬ。と。さ。う。おも。亡。骸。を。親。族。に。任。用。し。て。そ。が。あ。赤。貝。の。御。小。う。り。し。
 い。ち。ち。吉。見。は。あ。り。し。と。い。ふ。雙。言。を。索。ね。て。物。ん。ど。と。い。ひ。ま。ら。れ。ば。僕。ハ。只。の。知。り。心。あ。り。し。
 本。つ。つ。の。と。い。ふ。名。を。き。く。次。將。者。あ。り。し。告。す。ん。三。三。ね。り。あ。り。し。相。譚。ん。と。い。ふ。あ

うらひひつ疑ひなるおあねも背にけり入る庭に立在りて知る事なき
 人方とせんとかうしとて刀野の奸計主君の厄難救ふとてその密然ハ温
 ぬ外ハ絶てあるものを親の仇ハ主君の讐をこの惑ひの釋をあらまわ
 土民の錦蓋を足利殿の具負あつ刀野は怨ハ復されど切て故主の先途を
 おもむく心せうく咄めせむを推問さうら尋らまう取用ひくさるわら
 主恩は報もえ仰つけられと頻りに請うて已ざれば美邦も廣光も管
 嘆賞一年來汝が老実ある志をまうたれば密然を吹さるも聊疑所
 然らぬ親を替せ従事を替せし心の憂ひ切あるとさうく還て亡骸を
 葬せよと叮嚀せよ愉せよ葉二郎ハ主君の心りけり立退りぬるに
 おで送つけりぬるにぬるのあつ途までも俱へて頻りに已ざれば
 井平とて推禁め志のさうとかなる多量の口受の時移らば後悔其れ

たるが。時夏その性狐疑多う故めて其よりくまで心をゆるさんやこの
 人は移れらるその一人ハ年とわたり是則引太郎あつ既に深痕を負ひながら
 砂飛砂を打ちけく脱去んとしとて其れと替とあつ是れ其の深痕を所
 なく脱れがたをあらとて時夏某をあらむりも疑わなく腹心を
 あつせりバ遂は辞あつ及べる所詮其ハ冠者ハ俱して甲夜の間ハ他郷
 走る葉二郎ハ三三の内室浅良井のを扶引けその子小三を脊負て
 赤貝の宿所ハ伴ひふく藏して相俟べ江生ハ且く留めて舊縁家財を
 集め赤貝まで退けて内室子息を相伴ひ冠者ハ追著る。室平ハ数兵
 ども吉見の二字を脱半ハ対面の兵夜の中よりち向人も量りし
 ありとくハと只管ハ將交せば主従この誤ハ隨いつ廣光ハ遠く主庫より
 金出ハ来れば美邦これを配分してその一包を腰に纏又三包ハ廣光夫婦

井平が腰に纏ませその下包に送りし奴婢も取せんこの餘
 沙金十兩あまりありたるを親従才の香真も藁二郎よとせつ先足弱
 落さんとも美邦廣光齊一件の密綫を浅良井と説示てとくく落
 よといそぐせば浅良井の綽の趣をあらわめて信りて忘るありくも
 騒ぐぞ睡眠る小三を横ぎる抱れ来て藁二郎は負まればいそげや
 急げと焦燥良人よ辞別を隙とあり裳高く引掲る三人つぎ立三具
 夜の闇の枝折の庭櫻肩よりうらめて散る花の白ひを袖よりあむ折戸を
 開けい走去る當下美邦ハ井平が謀るに任して猛り廣光して額髪を
 剃落させ衣裳を更割箆を腰より草鞋の紐を結びつ又廣光を招き
 近づけ往方他所を求めん加賀の小松よ赴くべし美秀今も彼外に
 ありぬ汝達遥々後々とも佐味竺内が宿所も集合よ只禍を未然に

さけおやがて

みづりまれど。とく。閑よと焦燥の廣光やぐ。門放て。門扉もに。
 誘はる。と。い。い。も。ま。ま。は。い。む。し。と。う。も。あ。て。書院子舍。便室。庖。福。あ。彼。処。
 と。む。う。と。に。残。る。曲。な。く。索。れ。だ。の。美。邦。絶。て。ん。え。ざ。れ。が。室。平。お。ろ。く。焦。燥。て。く。れ。が。
 ち。や。逃。る。外。面。搜。せ。と。雜。兵。共。侶。舊。の。如。い。で。求。れ。ば。廣。光。怒。り。堪。り。ひ。く。お。い。
 狼。藉。の。師。任。ぬ。郷。士。う。も。源。家。の。一。族。義。邦。の。所。要。あ。ら。ば。礼。儀。儼。々。對。面。
 せ。で。穉。の。仔。細。も。説。示。さ。ば。尾。陋。の。舉。止。の。意。を。ゆ。せ。入。る。を。留。守。う。け。ぬ。り。し。
 廣。光。か。て。い。へ。そ。が。隨。う。さ。え。ち。い。は。せ。も。果。は。室。平。ハ。丁。と。既。で。命。を。立。命。せ。ぬ。
 下。郎。か。原。来。汝。が。美。邦。を。躰。さ。ば。八。落。せ。一。あ。ん。者。共。這。奴。が。骨。を。扱。て。首。代。
 さ。せ。よ。と。敦。圍。が。け。ぬ。ら。と。左。右。あり。立。掛。ら。ん。と。ま。う。た。と。破。と。あ。ら。ぬ。の。光。と。共。一。人。
 眉。間。を。破。ら。れ。ど。叫。び。も。あ。ら。ば。仰。及。壇。一。う。も。刀。を。入。二。段。ま。あ。り。て。行。は。さ。り。ま。ぬ。
 騒。ぐ。野。兵。も。八。方。より。推。取。圍。で。搦。捕。人。と。競。ひ。懸。は。廣。光。ハ。必。死。の。大。刀。風。

義邦の
つせつ
図説を
巻の
まき
えん
えん



廣みつ

月馬一巻目

勇を
奮て
義秀
ひろ
廣光
を
と
と



朝ひか

八つ平

朝東二巻目

十一

多勢を敵より難立川立是首あられ被起る隠れ秘術を盡せし瞬間
 八九十獲を負し三人矢庭に伏せしこの勢ひ色あられ多勢の中は割て
 今門外へ衝と走れれば彼逃せかど室平八頼は夥兵を駆辛て透間も追逃す
 廣光命を惜むあねねは美邦を必ひの隨は遠く延きと多し久且戦ひ
 且走して三四町乾あつ竹藪を盾小しとの如く踏ままり反る大刀を推直して些も
 撓む戦の程は春の夜あき短くてや東雲はなうにたり廣光あつ悍と
 いふその身鐵石はあふしの數刺の苦戦は腕疲も天も明ハ脱れがじと心
 まあ焦燥まよあつ竹の根は落ちて忽地撞と轉輾はるるや応と兩三人
 先とぞ累もて繩をうけんを聞かおろ廣光の臥つても足を揚そ突倒し
 刺してハ筋斗を撲せ身を起さく程はか室平八夥兵あつと遊さんとせ
 勢をたぬ數のくさあせありのば一怒て廣光の頸をくんとする程は誰とあつと

子身曲

藪の中より猿臂を伸して室平八頼を無心と引獲て反あつと投退れを
 驚く夥兵も左右へ散と逃退たり呆れて藪をうち熟視ま竹さやくと搔
 己たぐまの半身をあつと毛は是則別あつ朝夷三郎美秀之蘭鐵の
 笠を脱捨て濁と睨眼の光は夥兵あつと魔てそがま地上はるる
 伏し室平八進んとするは項背を遣ちが腰さへ抜けて起もほだ但見盛暑の
 土狗土中を覆死出され更は日影はむらぶ如く又彼白昼の群鼠墓りく
 その鼻を毀られて猫のほろろは出るは似たり廣光あつひけり美秀は
 救れて還しく身を起しあつと朝夷何の程あつと集ませし寔は
 不思議の再会とあつと美秀もあつと竹踏打り歩も某途とあつとあつと
 の存心あつとあつと走れり且息を吐き他言もあつとあつと

朝夷巡瀆記全傳第二編卷之四終

